

労働者思想の強化 私たちの方針

搾取・剰余価値・国家

1、労働者を取り巻く情勢

①「少子高齢化」「労働力不足」と言われながら、若者を中心に雇用破壊（非正規化）が進み、長時間労働と低賃金化がまん延している。その主な原因は、独占資本の合理化など搾取強化と、闘う労働運動の低迷にある。

②安倍政権の下で、10月に実施された衆議院選挙結果で改憲派が5分の4（維新・希望を加えると）となり、更なる雇用と労働条件の破壊（労働法制の改悪）が進められるとともに、消費税増税・社会保障切り下げなどの国民生活破壊と民主主義・平和憲法破壊が推し進められている。

2、反合研の基調

①労働運動は、資本の利潤追求・労働者への搾取強化に対する自然発生的闘いとして起こり、多くの犠牲を出しながら労働者階級は、資本と闘い続けるための「労働者思想」と、継続する団結組織である労働組合の大切さを学んだ。

②これに対し資本は、労働者の闘う思想と団結を切り崩すために、「労使協調」の思想に基づく第二組合結成や、労組幹部丸抱えなどによる労働組合の体制内化をたくらみ、今日の労働運動の低迷に至っている。我々はこれを、国鉄分割民営化と総評解散・連合結成で目の当たりにしてきたが、資本と闘う労働運動を根絶やしにする攻撃は、今なお資本による「生産性向上」などの思想攻撃を中心に、組合幹部・組合員の対象を問わず、やむことはない。

③労働者が「健康で文化的な最低限度の生活」（憲法25条）や「人たるに値する生活」（労基法1条）（つまり、「大幅賃上げ」や「合理化反対」）を要求し闘うことは、利潤追求のためには労働者を犠牲にする資本と闘うことを意味する。労働者と資本の利益は相反するのである。だから資本は必死に労働者の立ち上がりを抑えようとし、弾圧・懐柔・分断などあらゆる手を使う。労働者は闘わなければ生きられないし、「労働者思想」を学ばなければ、闘い続けることはできない。闘い、学び、団結（＝組織拡大）することが、今の国労運動にとって重要であり、反合研は、この立場から国労運動の強化に貢献したいと思う。

3、我々はどう闘うか

①資本と闘う労働運動の再生を目指す。

②そのためには、我々が主体的に運動を作る自覚と責任が必要になる。長時間労働（超勤・要員問題など）と低賃金、劣悪な職場環境、会社の職場支配などに対する共に働く労働者の要求をもとに、反合研に集まる同志一人ひとりが具体的な闘いを作る。

③分会組織の再編を行い運動の活性化と共に、若い労働者を取り組みに参加させ、国労拡大に取り組む。

④平和と民主主義を守る闘いをはじめとする全労協、とりわけ北部労協や台東下町反

戦などの共闘運動を大切にする。

⑤「資本と賃労働の対立」という資本主義の本質を学び、労働者思想の強化が図れるような学習会を強化し、支部機関でも取り組めるよう努力する。

⑥これらの取り組みを通じ、エリア本部・地方本部の闘いを改善強化していく。

⑦反合研としては、今後も、社会発展の歴史としての唯物史観、搾取と剰余価値を中心にした資本主義社会の仕組み、安倍政権により露わになった国家の本質を学ぶ学習の強化に取り組み、自己批判・相互批判を通じお互いの成長と団結を強化する。また、平和憲法や労働法制を守る闘いを通じ「三支部交流会」の中心を担う。

(国労上野反合研)

永田町を百万以上で埋めつくす

―国会前の闘いから滋賀へのアピール(四)―

共感を支えに 共感を支えに「反発に冷静に向き合っていく」ということがすごく必要だと思うのです。この前街頭宣伝をしていて、顔をウチワで叩かれたりして「このクソジジイ!」と思ったのですが、ここで「何で怒っているのだろう」ということを冷静に捉えていけないと思いました。また、戸別訪問していると、子ども頃の小林よしのりさんの漫画を読んでいたであろう40代位のオジサンが出て来て、「憲法って法律と同じでしょう」と言うのです。「全然違いますよ」というと、プライドが傷つけられたみたいで「俺は知っているぜ世の中のことを」みたいな感じで私を「生意気な小娘め!」と論破しようというのと話してくるのです。

ちょうど40代位の中堅どころの世代の人たちって、「あんたに言われなくても俺は知っているぜ」と言う感じの方が街中で活動していると多いなと感じます。そういう方たちがよく言うのは「憲法はこれからどんどん変えなければいけない」というのです。「俺は改憲に反対だよ、でも安倍さんのいうような改憲が出来ないように改憲をした方がいい」と言うのです。「自衛隊が武器を持って海外にいかないような憲法にした方がいい」と言ってきた、必ず「反対だけしか言っていないじゃないか。対案を出せ」というのです。「対案は現行の憲法9条です」と言ったのですが、「それではダメだ、もっと対案を出せ」と。「うーん」という感じですけども、そういう人もどうやったら取り込めるのかなと考えるのです。小林よしのりさんのお坊ちゃま君とか子供のころ読んで悪露名になったら「戦争論」を読んできたのかな? そういう世代の人たちがかなり多いわけですね。団塊ジュニアの世代。でもあの人たちが動くか動かないかにより結構変わるのですね。民主党政権になった時も、みんなの党がものすごく伸びた時も、やっぱり40代位の人たちがガツと動いたからなのです。あの人たちをどう動かすかということ、こちらからすると「生意気な」というような意見にも冷静に捉えて、「どうしたら響くかな」ということを考えていかなければいけないと思ったりと、戸別訪問で学ぶことはすごくあります。

ほかに、チャイムを押すと始めは結構愛想よく「ああ何ですか」とインターフォンや玄関口に出てきてくれるのですが、「憲法が」というと、急に「いま夕食の支度

をしているので」と切られたりするのです。午後3時から夕食の支度をするのか、懐石料理でも作っているのか？と腹立ちますけども、そういう方、結構多いのです。「お台所に戻らないといけないので」とか言われると、こちらも「一生台所にいる」何て思うのですが、そういうふうにして戸別訪問を一つひとつやっていくというのはなかなか大変だけでも面白い発見もある。「憲法イコール政治」のような切り捨てられ方に、どうやって入るか、なるべく入口はソフトにしようとか、そこで段々切磋琢磨されますから、それをぜひ街頭とか職場に活かすチャンスにしたいと思えますので、勇気が要りますけども戸別訪問で会話術を磨いて響く言葉をたくさん探して欲しいなあと思います。

若い子の意識 いま若い人がなかなか立ち上がらないという話があります。若い人は私も同世代の人を見て思うのですが、尾崎豊とかヤンキーとかは私たちの時代はなので。私は1989年生まれなのです。ちょうどバブルが崩壊した時代なので先が見えない時代なので、怒ることがない、全然怒る理由がない。そういう中で「立ち上がれ」とか「団結だ」といっても全然響かないのです。そういう子たちにならうって響かせるかなというのはすごく難しい問題なのです。

本当に目立つことが嫌な時代です。お揃いが良いのです。友だちと遊ぶ時にも服装を被らせてくることが私たちの時代で流行っている。そういう人たちが街中で立ち止まって名前を書く行為が恥ずかしいのです。一人でご飯を食べられない子がいっぱいいるのです。そういう子が街中で立ち止まって署名をするなんて、こんな恥ずかしいことはない。私たちがずらつと並んで署名をしていると、端っこから歩きながら悩んでいるのです。悩みながら一番端の目立たないところで署名を意を決してしてくれたりするのですけども、立ち止まること自体がすごく勇気のいることなのです。

街中でどうしようか迷って後ろ髪をひかれる思いで通り過ぎて行く人は必ずいます。そういう人のところに戸別訪問で訪れて行くと街中に居た人が家に来たということになる。また逆に家に来たという人たちが街中でみたと。さらにテレビのニュースでもみたと。そこまですごく「何かすごい運動なの」かん？と思ってもらって「インターネットで調べてみよう」と、ここで初めて興味を持ってもらえる、行動してもらえるところに結びつくと思うのです。色んな所に私たちがどんどん出没していくというのが、相乗効果としてハードルが段々上がっていくのではないかと思うのです。私たちはどんどん前に出て行かないといけないと思うのです。

未来は今日から 私も13歳の時から市民運動を始めて中立派の市民運動をずっとやってきて、4年位足踏み時代もありました。「政治に関わりたくない」と思って、新聞もテレビも見えない時代もありました。消耗しちゃって。しかし、消耗期間もあったからこそ思うのは、市民運動が出来ることはそういった同じ目線で草の根の運動をするというのが強みなんだと思っている。あとはずっと市民運動をやってきてやはり先輩たちの背中を見て運動を続けてきた。「若い子若い子」と言ってくれますけども、やっぱり仲間が街中で反動的な人に絡まれたりした時にみんな助けにいかなければいけないとか、そういう運動の基本的なものというのは先輩たちの背中を見て学んで

きた。

デモでも何でも運動の先輩たちの背中を見て後をついてきたことがあるから運動を続けられてきた。だから若い人たちにどう立ち上がってもらえるかと考えることも大事だけでも、私たちがどどん街に出ることによって若い人は気づいてもらえる。気づいてもらうことが必要なのではないかなと思うので、是非どどん街中に出て行って頂きたいなと思っています。

これはヨハネパウロ2世が言ったことですけれども、「未来は今日始まる、明日始まるのではない」と、これは本当にそうだなと、今日早速この集会が終わった後に街頭宣伝をやられるということで早速実践をしているなと思いますが、本当に未来は今日始まっています。

この70年間、たくさん亡くなった方がいます。運動をずっとやってきた人がたくさんいるわけです。そういう人たちがいまの平和憲法を引き継いで来ていると私は思っています。負けっぱなしの運動だと良く言われますけども負けっぱなしの運動なんかではないのです。黒星を憲法が持ってきたのだと思うのです。だから70年間ずっと運動を続けて守ってきた人たちの運動を引き継がなくてはならない。ここで途切れさせてはいかんと思うのです。何のために頑張ってきたのだ。何のためにアジアを侵略してたくさんの人たちをころし、広島・長崎でたくさんの方が原爆によって亡くなって今なお被爆の後遺症に苦しんでいるのか、沖縄でもたくさんの方が集団自決をして、戦争のために死にたくないと思つて亡くなって来たのか、ここをこの過ちは繰り返しませんと私たちが誓つたこの誓いをここで踏みにじったらいかんと、本当に何のために頑張ってきたのかということになってしまいますので、この安倍改憲はここで止めなければいけないと思うのです。

国民投票の欺瞞 あと最後にもう一つ、国民投票で頑張ろうという人たちがいるのです。これは本当に危険だと思つています。今の日本の国民投票法（改憲手続法）というものはものすごく危ないのです。

まず金かけ放題、朝日新聞に日本の国民投票法はどういうものなのかが掲載されていた。金銭で売買して良いと書いてある。例えば組織でお金を出して組織としてやるのはダメだけでも個人でやるのは良いのです。個人が金を出して「賛成に投じて下さいね」と言うのはOKなのです。どう思いますか、金で買える選挙です。

さらに金かけ放題の上にCM流したい放題なのです。CMの枠があるのですけども1番お金がかかる枠というのが、月火水木金土日の朝の時間帯と日曜日は全時間帯の逆L字がお金がかかってたくさん見てくれる人が多い、日曜日はつけっぱなしにしている人もいるし、朝は全部付けるし、ここを全部取るとたった15秒のCMですが50億円かかるのです。私たちはそんなお金はない。私たちがCMするのは深夜のタモリクラブの時間帯、くだらない深夜番組の時間帯しかCMを流せないと思うのです。

ここで安倍首相がお花見なんかに行つてたくさんの方の芸能人を集めているが、嵐とかその辺がCMに出て「自衛隊ありがとう、これからみんなで憲法変えよう」とかを15秒やっただけで絶大な効果ですよ。私たちが、ピンポン押して「あの一」とかや

っているよりは、嵐が15秒テレビでやった方がずっといいのですから、そうなったら困るのですから、そうならないように改憲発議をさせない、そこを止めなければいけない。それが3000万署名なのです。3000万の数が改憲発議阻止の大きな数字になると思うのです。

火種つくる しかし万が一改憲発議した時にはこれは皆さんにもお金を貯めて頂いて東京に来て頂かないといけないと思います。100万人以上の方が永田町を埋め尽くす、これをやらなはいけないと思います。全国市民アクションとしても今は全国動員をかけていけないけども来る時には永田町を100万人単位で埋め尽くす。是非皆さん今からお金を貯めて、「これはいかん」と言う時には呼びかけますので永田町を埋め尽くすというそういうことをやらなはいけないと思います。必ず風が吹きますから、その時にはウワーっと盛り上がるために、今燃え上がると燃え尽きてしまうので火種でいて下さい。

じわじわと運動は続けることが大切なので、続けるためには火種でじわじわと燃えていてください。そして来るアベの風がバツと吹いて来たら、津々浦々燎原の火のごとく燃え上がる。そういう運動を起こしていけないといけない。

私も火種でいなければいけないということで地域、職場、学校色んな所に火種をまいて来たる時にはワツと結集をして安倍改憲を止めなければいけない。「これだけの民意があるのだぞ」と、そのためには急には火種になれないので皆さんが地を這うような闘いをということを思っています。地を這うような闘いは大変ですが、国会に集まることだけがクローズアップされていますが、それだけではないのです。運動は私も草の根の運動をずっと続けていきますけどもまあ大変ですよ、暑い日も寒い日も、寒い日に街頭宣伝やるとポールペンのインクが出なくなるのです。そうやって何年も何十年もやってきているのです。ここで私たちの平和の灯を消さないためにどうかここでもう一回歯を食いしばって、安倍になってから全然休みがないと思いますけども、もう疲れていると思いますけどもここでもう一回歯を食いしばって頑張りましょう。(菱山 南帆子氏の「安倍の9条改憲NO! 市民アクション・滋賀」講演録・終り)

三池闘争、国鉄闘争そしてマルクス

— 四国の仲間たちの国鉄闘争総括運動に学ぶ —

浜田「講演」

昨年の12月、「国鉄闘争センター―四国総括総会&合宿」が高知市で開催され、浜田嘉彦氏の特別講演「国鉄闘争の経験を生かし、階級的労働運動の再構築に向けて」の講演内容が、『社会通信』No.1259(2018・3・1)号から4回にわたり掲載された。浜田氏の講演録の中で、四国に常駐しながら頑張ってきた北見闘争団の中野さんがまとめられた「総括報告」のことが紹介されていたので、中野さんに連絡を取り、当日の資料をメールで送って頂いた。私は、国鉄闘争がとりあえず終結したことをもって、全国各地で国鉄闘争に関わった方々の総括運動を提起し続けてきた。

浜田氏の講演内容は、非常に簡潔にまとめられていて闘争の本質と急所を抑えており大変わかりやすく解説されている。全国の仲間たちにも大きな教訓となったと思う。私も大いに勉強させていただいた。

最後の決戦

国鉄闘争に深く関わってきた私も現在、24年間体験した様々なエピソードと共に、私自身の「自己批判的総括」をまとめる作業が続けている。私は「争議」としての国鉄闘争は終結したが、国鉄闘争の本質ともいえる「国労を潰し、社会党・総評を解体して新しい憲法を安置する」という問題は、「官製春闘」に代表されるように独占資本の労働運動の更なる締め付け策動や、社会主義勢力の動揺と自信喪失・弱体化、独占資本とその政治代表である自民党が憲法改悪を強引に進めている現在、国鉄闘争は最後の決戦とも言える段階に達したと捉えている。

私たちは解雇された闘争団・家族が「可哀そうだから」闘ってきたわけではない。もちろん、闘争団・家族と身近に接してきた私は、不当にも悪者のレッテルを張り付けられ、解雇された屈辱を充分承知しているし、生活の苦しさ、進学を諦めた子供たちを目の前にして、その度に涙を流しながら、どうすれば良いのか、支援の在り方まで思い悩み、心の底から「可哀そうだ」と同情してきたのも偽りない事実である。

しかし、総評が解散し国鉄闘争がナショナルセンターの支援がない中で、過去に例のないほどの規模で、「生活と闘い」の両立をめざす国労に対して、何故ここまで全国的な支援・共闘態勢が長期間維持されてきたのか、その理由は簡単である。日本最強といわれた国労が闘わずして闘いの土俵から下りていたら、闘いは成立しない。私たちは国鉄闘争を通じて日本労働運動の再建・階級的強化と戦前回帰の暗黒な時代に逆戻りさせてはならない。自らの職場の合理化や労働者の非正規化などに真正面から闘える態勢の再構築と平和と民主主義を守る闘いに国鉄闘争を重ねて捉えたのであろう。

古典はいつも新しい

私は現在、前述の「国鉄闘争の自己批判的総括」をまとめる作業と同時に、「三池闘争」「国鉄闘争」「全電通千葉闘争」の本や資料を読みあさり、これらの組合がどのように「強い組合になったのか」を研究作業に取り掛かっている。

「今更、三池か古いよ」、「国労は修善寺大会が間違い」、「全電通千葉はやりすぎ」などの声を耳にする。それらの方々に共通しているのは、「今時、職場闘争とか合理化闘争なんて通用しないよ。ましてや階級闘争、階級的労働運動などは夢物語である」と。しかし、これらの組合の闘いは決して古臭いものでも、間違いでも、やりすぎ、でもない。過去の闘い、歴史に学ぶことは決して無駄とは考えない。今、私はあえてマルクス、エンゲルスなどの書物を読んでいる。

「三池は古い」というなら、今年マルクス生誕200年、マルクス、エンゲルスの『共産党宣言』が発刊されたのは170年前、『資本論』は101年前である。今、読み返してみても決して「古い」とは感じない。なぜなら、資本主義の法則を科学的に説いているからである。

ベルリンでは今年5月、マルクス生誕200年記念の学術会議が開かれた。出席した大阪市立大学准教授の斎藤幸平さんは「マルクスの評価は海外で高まっている、女性や若者の参加も目立った。新聞も一面で取り上げるほど」という。「海外では基礎研究も進む。アムステルダム財団が編集・刊行する『新マルクス・エンゲルス全集』（MEGA）は、ノートや草稿を網羅した文字通りの全集だ。全114巻のうち、これまで半数以上の巻が刊行されている」。立教大学准教授の佐々木隆治氏や斎藤幸平氏も編集に携わっている。（2018・5・28、東京新聞「マルクス生誕200年」から引用）

階級的労働運動

三池、国労、全電通千葉も自然発生的に組合組織が強くなったわけではない。共通しているのはマルクス主義の学習を熱心に行い、「職場闘争」、とりわけ「反合理化闘争」を文字どおり実践し労働者の階級的意識を高め、階級闘争路線を真面目に追及したということ。まさに「学習・合理化・社会主義」の実践である。

三池労組は現在存在していないが「長期抵抗統一路線」をはじめ、灰原氏、塚元氏をはじめとする三池の労働者、指導し共に闘った向坂逸郎氏の書物も決して「古くさいもの」ではない。

全電通千葉は、当局、社会党右派、全電通本部が結託して介入し潰しにかかったのであった。全電通千葉の闘いでは、大量の活動家集団が誕生した。この運動が全国に広がることを怖れて攻撃してきた。特別なことをしたわけではないだろうが学ぶべきことは山ほどある。

現在、「過労死」や「非正規労働者」、そして「働き方改革」が問題となっているが、資本の攻撃を見逃してきた、いや助長してきた右派労働組合。そして、労働者も「うつ病」や「死ぬまで働く」という権利意識の欠落。年休も自由に取得できず、ましてや生理休暇は殆ど取得されていない。単身赴任にも抵抗することなく当たり前のようにさせられている。

国鉄闘争の総括運動を通じて、階級闘争路線の再構築を訴える浜田嘉彦氏に改めて敬意を表し、私たちも引き続き頑張っていくしかない。（山下 俊幸）

「新松本百景」で紹介された向坂逸郎著『マルクス伝』

― 園廉三と扉山人を想う ―

(一) はじめに

目下縁あって、人民戦線事件（一九三七年十二月十五日）での向坂逸郎先生について勉強させてもらっています。本場に「縁」あって！を感じています。私の高校時代に、副担任にして国語の教師であった恩師小林俊樹先生（コバシユン）のことを思い出しつつ、もっと聞いておくべきことがあったのにと、後悔もしています。

小林俊樹先生は二〇一六年十一月二十七日に83歳で逝かれ、同年十二月十八日に深志教育会館にてお別れの会が行われました。愛妻の園子夫人が、先生より一週間前

に逝かれこともこの時知りました。お別れの会実行委員長の赤羽総一郎さんが東京大
学教養部時代には塚本健教授のゼミ生であったこと、これも私には不思議な繋がり
感じました。ご案内のように、人民戦線事件に先立つ一九二八年（昭和三年）の3・
15事件で、向坂先生と共に九州帝国大学を追われた塚本三吉氏の御息こそ、塚本
健先生だからです。

コバシユンからは高校時代に二年生で漢文、古文、三年生で現代国語と一通り「赤
点」をもらいました。そして卒業してからも（高校生の時は勿論！）、宴席とアルコ
ールの苦手な私は、お酒好きのコバシユンとのお付き合いを苦手とし、お声が掛か
っても出掛けないという、不詳の教え子でした。

さて、人民戦線事件での弁護士について、向坂先生は次のように記しています。

「私の弁護士になってくれたのは、いま大分県知事をやっている木下郁さんと榛村
専一という私の妻のいとこでした。榛村は、もう故人になりました。ふたりとも、弁
護料は一文もとらないどころか、ときどき先方からもらい物をしました。」（向坂逸郎
著『流れに抗して』講談社現代新書1964年12月刊）、と。ちなみに、私の書棚
にあるこの本は百瀬嘉郎さんよりいただいたものですが、百瀬さんはもう一冊、向坂
先生からのサイン入りの贈呈本を持っておられました。

不思議な「縁」を感じるのは、コバシユンの早稲田大学以来の親友榛村純一氏の父
上こそ、榛村専一弁護士であり、この「縁」から「新 松本百景く峠の新緑（松本市
入山辺）」というコバシユンの一文が生れたのですから、紹介させて頂きたいのです。

〔註〕静岡県掛川市長を長く務めた榛村純一氏は、『地方分権事始め』（岩波新書）に
も登場するに「アイデア市長」として有名でした。ゆき夫人からも純一氏の早稲田大
学入学試験時の豪快というか、その蛮勇について伺っていますので、思いのままを語
り、生きたコバシユンとは、本当に仲が良かったと思います。純一氏の早稲田大学入
試の時の宿泊先は、向坂逸郎宅でありました。

（二）「峠の新緑（松本市入山辺）―扉温泉から森林浴をかね―」

今は廃刊となつてしまいましたが、松本平の地元紙『中日新聞松本ホームサービス』
では「新松本百景」と題して、柳沢健氏による松本平の名所を描いた風景面に、小林
俊樹先生が解説文を添えたものが連載されてきました。毎号一面を飾っていたこの企
画はなかなか好評で、ファンも多かったと思います。

今回全文を紹介させていただくものは、1991年5月2日（木）発行の第683
号での「峠の新緑（松本市入山辺）く扉温泉から森林浴をかねく」と題されたもので
す。向坂逸郎先生が戦後三回に亘って『資本論』を翻訳し、『マルクス伝』や『資本
論入門』等の他に長い論文を書くために逗留したのは、松本市入山辺の扉温泉明神館
です。まずは、恩師小林俊樹先生の味わいある文章で、「扉峠の新緑」を楽しんでい
ただければと思います。

〔註〕『中日新聞松本ホームサービス』は松本平の各家庭に無料で配布される週刊新
聞で、「新松本百景」連載の頃は、初代の上島忠志編集長の下、7万7千部が発行さ
れている地域密着の情報誌でした。編集長は私にとってはとても大切な高校時代の「政

治経済」の恩師であった上島忠志先生（カミチュウ）で、東大法学部で丸山眞男教授に提出したゼミ論文の「政治に於けるロゴスとパトス―木下尚江の思想をめぐって―」は、戦後の木下尚江研究の先駆けであったようで、活字にもなっています。カミチュウは「木下尚江研究会会員」でしたが、会員には家永三郎先生も名を連ねていました。私は卒業後も引き続き、カミチュウには郷土史や平民社によった人々の研究で指導を頂きました。何冊も頂いた本の多くは、鈴木茂三郎等社会党関係者の伝記本でした。

峠の新緑（松本市入山辺）―扉温泉から森林浴をかね―

薄川をさかのぼり、中電の発電所のいくつかをめぐれば扉温泉にたどりつきます。近年完成したダムの直下にある群鷹館、昔ながらの位置に、鉱泉時代からの姿を留める明神館―扉温泉はこの二軒の湯宿によって、昭和の歴史をけみして来ました。

社会主義者向坂逸郎は、明神館の一室でその著『マルクス伝』を執筆しました。旅館の入り口の巨岩を覆う藤の花や、谷川のせせらぎに思索の疲れを癒したであろうことは、容易に想像されます。

峠への道は、この温泉場から一段と屈折を加えて登ります。針葉・広葉の緑の中を、時たまに上下する車を避けながらの森林浴です。カラマツの萌黄が覆いかぶさり、谷をはさむ山の雑木が、それぞれの特性を發揮して、ほどよい配色の妙を見せています。登れば、峠の茶屋ならぬ扉山荘を経、やがてピーナスラインに合流します。全山新緑の眺望です。

扉の名は、外からのものを一切はばむような、山荘近くの絶壁を削った切り通しに由来するのでしょうか。この切り通しに扉を立ててみたくもなりません。それとも、戸隠伝説とのからみ合いもあるのでしょうか。路傍には昭和二十九年の開道記念碑が建っています。

峠を東へ下れば、中山道和田宿も遠くはありません。上下する車も、年ごとに増えています。（園）

さて、小林俊樹先生は現役の高校教師の時は、「園廉三（そのれんぞう）」というペンネームで地元紙等には記事を書いていました。「園」とは恋女房の園子夫人の「園」で、通常（園）と記していました。そして、先生によりますと「廉三」としたのは、「俺の文は、三文廉いからさ。」と言うことでした。退職後に地元紙等に書かれる時は、「日本山岳会会員・著述業 小林俊樹」でした。教え子達は、「コバシユン」と親しみを込めて呼び、誰一人として「先生」とは言いませんでした。

（三）何故に「新松本百景」で『マルクス伝』なのか

ところで、コバシユンが何故に「新松本百景」に向坂逸郎著『マルクス伝』が登場するのか、ということですが。この説明をしておかなくてはなりません。

『道は一筋―向坂逸郎を語る』（向坂ゆき編）が刊行された時、松本の地元紙である日刊紙『市民タイムス』にはこの書籍が紹介されました。紹介文には、市民タイムスの古川寿一氏が向坂逸郎先生が亡くなった時に同紙に書いた「松本は第二の故郷」、昭和五年以来向坂先生との長い交友のあった元松本市連合町会長の百瀬嘉郎さんによ

る「なつかしき安曇野」「石井拍亭と大論戦」、そして『信州の旅』編集長の藤田靖夫さんによる「巨星落つ」に加えて、私の拙文「日本のマルクス・向坂逸郎先生」が掲載されていることも記されていました。

そんなわけで、高校時代に赤点を惜しみなくくれた国語の恩師である小林俊樹先生に、私はこの書を恐る恐る贈呈しました。すると、コバシユンから電話がきました。その内容は、次のようなもので大いにびつくりしました。

「おい、俺だ、コバシユンだ。向坂逸郎先生のことに興味持っているのか？ 向坂先生の人民戦線事件の弁護士、何て人か知っているか？」というのです。続けて「シムムラ・センイチ（榛村専一）って言うんだ。向坂先生の奥さんの従兄だ。俺の大学時代からの親友シムムラ・ジュンイチ（榛村純一）の親父様だ！、それでジュンイチ（純一）はなア、新婚旅行は扉の明神館へ来たってわけだ。まだ扉までのバスがない頃でなア、俺たち夫婦が、松本駅へ迎えて、四人で明神館まで歩いたんだ。向坂先生が翻訳のために『資本論』の原書を担いで歩いた道を、歩いたってわけさ！」というのです。

「峠の新緑」を脱稿される時も、コバシユンから連絡をもらいました。「扉峠のことを書くことになり、親友榛村純一氏のこと、そして向坂逸郎先生のことを念頭に書くかと思う」、という内容のものでした。

また、小林俊樹先生は『道は一筋』の冒頭に、岡田喜秋氏の「山に登らない人の山岳観」が収録されていることを大変喜んでいました。自身が、日本山岳会の会員であると共に、岡田喜秋氏とは親しく交友していたからです。岡田喜秋氏が2012年に『人生の旅人・啄木』を刊行された時も、コバシユンはこの本の贈呈を受けたとして、『まつもと平タウン情報』に紹介文を書かれましたし、購入をすすめられました。

（四）扉山人による「扉温泉」―春は目の覚めるような新緑―

私は小林俊樹先生に、「扉山人」の書いた「扉温泉」の紹介文を差し上げてありましたから、コバシユンはその一文にも目を通したうえで、前述の「峠の新緑」を書いたのだと考えたりもしています。

「扉山人」とは、勿論、扉を愛した向坂逸郎先生のことです。扉温泉明神館主であった故齊藤忠房さんによると、向坂先生が「僕が宣伝部長をやろう！」と言われ、昭和30年頃の春に「扉山人」のペンネームで書いてもらったということですので、紹介させて頂きます。

扉温泉

扉（とびら）という謎のような地名が面白い。真理の扉、美の扉というような言葉を連想する。人生の幸福が、扉峠のあなたに深く秘められているかと思うような、人跡に荒されない山々のふところ、薄川の溪谷に扉温泉はある。松本市の東南四里、一、一〇〇メートルの高さである。

春は目の覚めるような新緑の中に、赤いつつじが素朴な人間のまごころを思わせている。夏になると、美ヶ原や鉢伏登山、避暑静養の客で静かな溪谷がしばしばにぎあ

う。しかし、涼風はこちよき室々には、読書人の来り遊ぶものは少くはない。秋は満山の紅葉燃えて、ボナールのようにけんらんとはえている。私はまた冬の扉を愛する。読書にあきた炬燵の中で、なにげなく溪流の音に耳をかたむける。遠くの方で大ぜいの人が、何かささやいているような錯覚をおこすことがある。私は酒をたしなまないが冬の扉温泉の炬燵の中で、気の合った友達のみかわす酒の味は、かくべつであるう。

扉は、額に汗して働く人々や、その家族のなごやかないこい、たのしいまどいの場所である。温泉を弦歌のちまたとしか考えない人々には無縁の所であるう。(扉山人)

百瀬嘉郎さんは、「向坂先生は、信州人は自分でつくったわけでもないのに、信州の自然を自慢ばかりしている！と言うんだ」と、苦笑いしながらよく言っておられました。しかし、この「扉山人」の文章からは、額に汗して働く人々への愛情と共に、信州の自然への愛情も十分伝わって来ます。

(2018年4月18日、新緑の里山辺で 中澤 秀行)

◇ 読者からのおたより ◇

全国キャラバンが水戸へ 全国一般労働組合全国協議会や全国ユニオン、コミユニティ・ユニオン全国ネットワーク、全港湾、全日建運輸連帯などで構成する『8時間働けば生活できる社会を』労働法制改悪を阻止するための全国運動実行委員会」は、働き方改革関連法案の廃案をめざし、地方から世論を盛り上げようと、4月20日、沖縄と北海道を起点に全国の主要都市を行脚する「全国キャラバン」をスタートしました。40以上の都市で街頭宣伝や集会、労働局要請などを行い、5月22日に東京・日比谷野外音楽堂で行われた集会(日本労働弁護団など主催)に結集。茨城ユニオンは、コミユニティ・ユニオン全国ネットワークの一員として、5月21日、水戸ペDESTリアンデッキで行った街頭宣伝に参加しました。水戸での街頭宣伝は、労働法制改悪に反対し8時間働けば暮らせる社会を、最低賃金全国どこでも今すぐ1000円、目指そう1500円という要求でのチラシ配布とリレートークでした。街頭宣伝の後、①「働き方改革」関連法案の撤回②違法残業の取締り強化③労災申請にあたっての速やかな調査、認定④最低賃金を今すぐ1000円に、労働者が最低の生活を維持出来る1500円への引き上げを本庁に具申⑤労契法20条による不合理な差別を行わない、同18条の無期転換を企業に督促、違法脱法行為による雇用の打ち切りに対して厳しく対処⑥外国人労働者の権利保障と労基法違反を厳しく取り締まる等々を記した要請書を茨城労働局へ提出しました。

コミユニティ・ユニオン全国ネットワークの岡本事務局長より、「23日にも国会で強行採決という話があるが、労働行政に関わってきた労働局の皆さんも今までと逆行してしまう。私達は労働法制をただ反対しているのではなく、今必要なことは、長時間労働の是正、生活に必要な賃金を要求しているのを受け止めてほしい」と主旨説明。労働局の各担当課長・室長から、「要請内容は本省に伝える」、「時間外労働、長時間労働、過重労働に対して厚労省は11月にキャンペーンを取り組み」、「最賃審議会も1000円を目指している。1500円はこれから厚労省に伝える」、「同一労働、同一賃金を目指し、働き方改革支援センターで個別紛争、雇い止めに対処していきたい」、「外国人労働者の人権補償技能実習機構が出来た。入国管理局とも連絡を取り、あたっていくたい」等の回答がありました。

「これからも茨城ユニオンと茨城労働局の間で話し合いの場を持っていきたい」と約束し要請行動は終了しました。「働き方改革」関連法案が5月23日にも衆院厚生労働委員会で強行採決されるかもしれないという緊迫した情勢の中、5月22日、首相官邸前に全国過労死を考える家族の会が安倍首相への面会を求めて座り込みを開始しました。(『茨城ユニオン』ニュースレター137号)